

マルコ 14 章 26～42 節「目を覚まして祈っていなさい」

イエス様が捕らえられる直前に弟子たちを伴いゲツセマネに行かれ、そこで祈られた出来事から、私たちに与えられている主の恵みを受け取りたいと思います。

1. つまずきとその後の予告（：26～31）

27 節。イエス様はご自身の受難の時が近づいていることご存じでした。また、弟子たちがつまずくことも分かっていました。ゼカリヤ書のことばを引用して、その預言の成就であると言いました。しかし、弟子たちがつまずいて、散らされて、そのまま終わってしまうわけではありません。イエス様は「わたしは、よみがえった後、あなたがたより先にガリラヤへ行きます」と約束されました。

ここでもイエス様はご自身のよみがえりについて予告しておられ、その時には、イエス様は弟子たちよりも先にガリラヤへ行かれると言います。弟子たちは皆、散らされるけれども、主イエス様がよみがえられた後に、彼らもガリラヤへ行くことになる、主イエス様はそこで弟子たちを待っていてくださるというのです。

そのガリラヤとは、イエス様が宣教を始められたところ、また弟子たちを召したところでした。そのガリラヤで再び会うことになるのです。宣教と主からの召しの原点に戻ります。しかし、最初と同じ状態に戻るのではなく、この後に起こるイエス様の十字架と復活の出来事がある、その救いのみわざを経験し、その上で「わたしについて来なさい」という主の召しに改めて応えて、再出発するのです。

たとえつまずいても、出会いの地で再会して、新しく再出発することができるという約束と招きを主は与えてくださいます。このような方だからこそ、私たちは主イエス様について行くことができるのです。

しかし、その前に弟子たちはつまずき、散らされる経験を通らなければなりません。すなわち、古い自分がつまずいて、死んで、新しくされる必要があります。けれどもこの時、弟子たちはそのことが分かっています。自分たちがつまずくと言われたら黙っていられません。弱さを見せないように強がります。一番強がっていたのはペテロです。29 節。ペテロの心意気は良いのですが、でもペテロは、自分は他の弟子たちとは違う、「私はつまずきません」と言います。彼は自分の弱さを認めていませんでした。自分に根拠を置いています。人は自分に根拠を置いて絶対に大丈夫だと主張することはできません。

30～31 節。自分がつまずくことを具体的に予告されて、ペテロはますます「力を込めて言い張った」のでした。けれども、弟子たちの決意はこの後すぐに、あっけなく崩れてしまうのです。

自分の力で主に従おうとすること、他の人と比べて誇らしげに従おうとすること、そのように私たちが古い性質のままにいるならつまずきます。いや、つまずかなければならないのです。しかし、主イエス様の十字架とよみがえりによって、私たちは新しいのちに生きることができます。聖霊によって助けられていきます。

イエス様の予告された通りに、三度イエス様を知らないと言ってしまったペテロも、ガリラヤで復活の主イエス様から新たに使命を与えられました。聖霊降臨の後、大胆にイエス様の復活の証人として宣教していくのです。迫害にも屈することなく、主に従い通したのです。それは、よみがえられたイエス様が羊飼いとペテロを養い導かれたからです。

私たちも、私たちのために屠られた小羊としてのいのちを捨てられたイエス様によって救われて、そしてよみがえられた良い羊飼であるイエス様によって、信仰生活を導かれていくのです。

2. ゲツセマネでの祈り（：32～42）

イエス様と弟子たちはオリーブ山の「ゲツセマネという場所に」やって来られました。他の福音書によると、そこはイエス様がエルサレムに来られた時には、いつもお祈りをする場所でした。まずここで興味深いのは、イエス様がこの祈りの場に弟子たちを伴って行かれたことです。福音書の記述には、イエス様が一人で退いて祈っておられた姿がしばしばありましたが、ここでは弟子たちを伴っていました。そして、ペテロ、ヤコブ、ヨハネを連れてさらに奥へと進んで行かれました。するとイエス様は「深く悩み、もだえ始め」、「わたしは悲しみのあまり死ぬほどもです。ここにいて、目を覚ましていなさい」と言われ、「少し進んで行って、地面にひれ伏し」て祈り始めました。

イエス様が祈られたのは、「できることなら、この時が自分から過ぎ去るように」という祈りでした。「どう

か、この杯をわたしから取り去ってください」と祈りました。「この杯」とは、これからイエス様が受けようとしている十字架の苦しみのことです。人々から見捨てられ、父なる神様から引き離されてしまうのです。もちろん、イエス様ご自身が予告しているように、この悲しみ苦しみはそれで終わらずに、復活の喜びへと突き抜けていきます。しかし、だからと言って平気で通り過ぎることができるものではありません。復活があると分かっているにもかかわらず、「悲しみのあまり死ぬほど」のことなのです。

このようにイエス様は深く悩み、悲しみ、苦しみながら祈られたご自分の姿を弟子たちに見せるように、この祈りの場に彼らを伴ったのはどうしてでしょうか。それは、ご自身が悲しみ苦しみを経験して知っており、その中を祈りつつ通って行かれ、道を切り開かれることを通して、ご自身に従う者たちを恵みの中に招こうとしているということだったのでしょうか。

私たちも主イエス様の招きに従う歩みの中で、苦しみの中を通ることがあります。しかし、私たちの苦しみよりもはるかにひどい苦しみを経験されて、深く悩みつつ祈りながら通って行かれた主イエス様が、私たちのどんな苦しみも分かっている、助けてくださるのです。その主が共にいてくださる恵みを証しすることができるようになるのです。

イエス様は「どうか、この杯をわたしから取り去ってください」と願いますが、それでもその後、「しかし、わたしの望むことではなく、あなたがお望みになることが行われますように」と祈られました。自分の願いを押しつけるのではなく、あくまでも父なる神様がなさろうとしていることに従います、と祈ったのです。自分の願いよりも父なる神様のみこころの実現することがイエス様の願いであり、祈りがその願いへと向かっていきました。

イエス様がそのように祈っている間、弟子たちはどうしていたのでしょうか。「ここにいて、目を覚ましていなさい」と言われていたのですが、弟子たちは眠っていました。37～38節。

イエス様は責めることなく、祈ることの大切さを教えました。このことばはペテロに語っていますが、38節の「陥らないように」いなさい、「目を覚まして」いなさい、「祈っていなさい」という3つの動詞はすべて原語では複数形の命令形です。つまり、あなたがたは共に祈りなさいと主は命じ、教えたのです。一人では困難でも、兄弟姉妹と共に祈って取り組むように教えたのです。

ところが、そう言われても、弟子たちはまた眠ってしまいました。39～40節。弟子たちは気まずかったでしょう。しかし、イエス様は弟子たちの状態を見ても、彼らを見捨てることなく、忍耐深く付き合ってくださいました。そして、三度目も同じようでした。41～42節。

主イエス様は深い悲しみ苦しみの中で祈っておられましたが、最後は父なる神様のみこころに自らを委ねておられました。父なる神様は祈りの中から主イエス様を立ち上がらせてくださいました。そして、イエス様は十字架に向かって最後の歩みを進めます。

後にペテロは手紙の中で書いています。I ペテロ 5章7～8節。このように書いた時、ペテロはゲツセマネでの主イエス様の祈りやことばを思い起こしていたことでしょう。イエス様は祈りつつ悪魔と戦っておられました。そして、ユダを初めとして悪魔の手先も近づいていました。けれども、自分たちは眠ってしまったという失敗をペテロは思い起こしたでしょう。しかし、失敗してもう後がなかったではありませんでした。イエス様の贖いのゆえに赦されて、新しい歩みに招かれました。ペテロは自分自身が主イエス様によって赦され、使命を与えられ、励まされてきたので、同じ主の恵みがあるとクリスチャンたちを励ましています。思い煩いをいっさい神に委ねて、一緒に目を覚まして祈っているようにと、私たちも励まされるのです。

たとえ私たちがつまずいても、主は私たちの罪を赦してください、私たちが古い自分に死んで、再出発することができるように約束してくださっています。その主イエス様に私たちはついていきましょう。

主イエス様に従っている私たちも苦しみの中を通ることがありますが、私たちよりもはるかにひどい苦しみを経験されて、深く悩みつつ祈りながら、その中を通って行かれた主イエス様が、私たちと共にいてくださることを覚えていましょう。そして、私たちのどんな苦しみも分かっている、助けてくださる主が共にいてくださる恵みを証ししましょう。また、一人では困難なことでも、兄弟姉妹と共に目を覚まして、共に祈って、取り組んでいましょう。